



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 21

May. 2006

目次

諸報告.....	2
日本植物分類学会第5回大会報告.....	2
大会見聞録.....	3
南国の春爛漫エクスカージョン.....	4
日本植物分類学会2006年度第1回評議員会議事抄録.....	5
日本植物分類学会第5回大会総会議事抄録.....	6
2005年度事業報告と2006年度事業計画について.....	7
学会賞についての細則の変更および学会賞、大会発表賞、論文賞に関する 選考規定の新設について.....	7
初代大会発表賞の受賞者決定！.....	9
初代大会発表賞受賞者独占インタビュー！.....	10
2005年度自然史学会連合総会報告.....	14
2006年度第1回メール評議員会議事抄録.....	15
2006年度第2回メール評議員会議事抄録.....	15
庶務報告（2006年2月～4月）.....	18
お知らせ.....	18
日本植物分類学会2007年度大会（第6回大会）について.....	18
書評依頼図書.....	19
出産・育児による研究中断後の日本学術振興会研究奨励金支給のお知らせ.....	19
鹿児島大学総合研究博物館植物標本室（KAG）一時休止のお知らせ.....	19
東京大学植物標本室（TI）の開室日についてお知らせ.....	19
平成18（2006）年度野外研修会のお知らせ.....	20
本の紹介.....	20
森林の生態学：長期大規模研究からみえるもの.....	20
豊橋市自然史博物館ガイドブック4 標本をつくろう～植物・菌類編～.....	21
いきもの便り.....	22
韓国の美味しい種・2・.....	22
中国植物記・2・.....	23
会員消息.....	24

諸報告

日本植物分類学会第5回大会報告

大会準備委員長 横田昌嗣

日本植物分類学会の前身である植物分類地理学会を含めても、沖縄県で植物分類学関係の学会の大会が開催されたことは、これまでありませんでした。日本植物分類学会第5回大会を沖縄県で初めてお引き受けすることになり、2006年3月18日～19日に西原町の琉球大学において大会を、翌20日には沖縄県北部の恩納村と名護市でエクスカージョンを実施しました。

会員の大多数を占める沖縄県外の参加者にとっては、大会参加は飛行機を利用した経費のかさむ旅行になるため、参加者数の見積もりが困難で、会期を通常より短い2日間としました。そのため日程が窮屈になってしまったことは申し訳ありませんでした。予想に反し、当日参加者を含めると一般108名、学生64名の計172名のご参加をいただくことができました。

2日間という限られた期間の中で、研究発表は口頭による30題、ポスターによる51題の講演がありました。今大回初めて大会発表賞が設けられ、大会発表賞に応募された発表は、口頭発表16題とポスター発表18題でした。2日目には口頭発表とポスター発表の各2題について邑田仁会長から受賞者が発表され、賞状と記念品が授与されました。引き続き、第5回分類学会賞を受賞された中藤成実、西田治文の両氏に邑田会長から賞状が授与された後、両氏が受賞記念講演をされました。

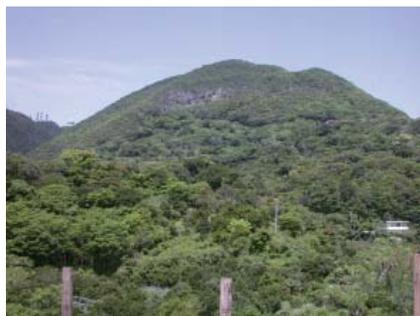
2日目のシンポジウムは、大会準備委員会と琉球大学21世紀COEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」と

の共催で実施し、シンポジウムは非会員の方にも公開しました。名簿に記名された非会員の参加者だけで63名あり、この他に記名されない方も多数おられたようでした。講演会場には200席を準備しましたが、立ち見の方ができるほどの満席でした。シンポジウムは開催地に因んだ「琉球列島の生物地理学研究—最近の話題と今後の展開—」のテーマで、5題の発表がありました。本学会の会員4名による琉球列島の維管束植物に関する講演の他、動物系統分類学でめざましい活躍をされている太田英利教授（琉球大学熱帯生物圏研究センター）に、陸続きでなければ移動できない両生・爬虫類の分子系統地理学研究の事例を化石による検証の結果もふまえてご講演いただきました。植物と比べると分散能力が限られ、しかも分子進化速度が速い脊椎動物の事例を考慮に入れることで、植物を用いた系統地理学の今後の研究に課題と問題点が見つかり、また多くの方に琉球列島の系統地理学に関心を持っていただければ幸いです。

懇親会は1日目に琉球大学生協中央食堂で開催し、113名のご参加がありました。沖縄は芸能の島で、祝宴では踊りの「かぎやで風」に始まり「カチャーシー」で終わるのが普通です。沖縄らしい宴会を期待してこられた方も多数あったかと思いますが、今回の懇親会ではそこまで準備が行き届きませんでしたことをお詫びします。

3日目に実施したエクスカージョンは、幸い快晴に恵まれ、49名の方のご参加をいただきました。大会参加者の実に3分の1近い方がエクスカージョンにも参加されるという高い参加率でした。時間的な制約で沖縄県北部のいわゆるヤンバルの亜熱帯降雨林をお見せできなかったのは残念でした。今回は恩納村万座毛の海岸植物群落、名護市嘉津宇岳の古生層石灰岩地の植物群落、名護市宮里のハスノハギリ群落を見ていただきました。これらの観察地は、いずれも沖縄県の天然記念物に指定されているため、観察だけという制約がありましたが、参加者のご理解とご協力をいただき、予定時間内に無事終了しました。

大会開催にあたり、事前に通知した大会



嘉津宇岳 (撮影・渡邊加奈)

会場を変更したり、大会案内のためのホームページを大会独自で開設しなかったり、ニュースレターのウェブ版に掲載された連絡先のメールアドレスが読みづらくてメールが届かなかったりと、数多くの問題と反省点があり、参加者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

国立大学が独立行政法人化してから、学会の大会のための施設使用料として高額な経費を請求されることが多くなり、今回も参加者の皆様から頂戴した大会参加費の3分の1は会場使用料として消えた計算になります。沖縄図書販売と講談社サイエンティフィックからご寄付をいただいたり、大会運営の経費を切

りつめたりしましたので、大会の運営は赤字にならずに済みました。少数の担当者で大会運営をせざるを得ませんでしたので、行き届かないことも多々あったかと思われませんが、ご容赦いただければ幸いです。

最後に、遠路はるばる沖縄までお越しいただいた参加者の皆様、邑田会長を始め大会の運営にご協力いただいた学会事務局の皆様、座長をお勤めいただいた先生方、大会発表賞の選考をしていただいた審査員の方々、シンポジウムで講演を快くお引き受けいただいた方々、ご寄付をいただいた上記2社、大会の運営に直接関わっていただいた多くの関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

大会見聞録

長本三鈴（島根大学）

今年度の分類学会大会は、沖縄県の琉球大学で開催されました。3月末だというのに松江市では、つい数日前まで雪が降るといように、今年の冬は、各地で記録的な降雪量が観測され、気象庁は、“平成18年度豪雪”と命名しました。このような、寒さが厳しかった今年度の大会が、沖縄で開催されるということは、私だけでなく、多くの大会参加者にとって、思わぬ幸運であったに違いありません。

大会二日目の一般講演、ポスターセッション、懇親会は、雨が降ったことも加えて、熱気（湿気？）が漂い、大盛況でした。特に、大学の食堂で開かれた懇親会では、沖縄の郷土料理や、さまざまな銘柄の泡盛に舌鼓をうち、沖縄ならではの‘おもてなし’を十分に満喫できました。

大会三日目は、午後に公開シンポジウムが開かれ、琉球列島に生息する動物と植物の両方面から、島嶼という特別な環境での多様性について講演が行われ、活発な議論が行われました。琉球大学の太田英利氏は、宮古島に

ハブなどの大型の動物が生息していないことを挙げられ、宮古島での調査、研究が遅れていたが、最近、ハブ、大型のイノシシ、ネズミ、巨大なシカの化石が発見され、それらの動物が生息していたこと、またそれらの大型の動物が生息しうる食料が得られなくなったため、現在の宮古島には生息していないことなどを話されていました。荻沼一男氏は、ハマボッサという二年草で、43島188ヶ所で約2000個体の染色体数と核型を調べ、各島嶼間で異なった、特有の染色体多型が観察されることを突きとめられるなど、どの講演者の方も、大変広範囲で、詳細な調査を行っておられました。そのような、島特有の動植物が生息する琉球列島で、減少する砂浜の砂を補填するのに、オーストラリアの砂を使うなど、移入種の問題、観光と生態系保護の両立など、困難な問題があることもシンポジウムで取り上げられました。

最後になりましたが、沖縄での大会開催にあたって、縁の下の力持ちになって尽力されました琉球大学のみなさま、おつかれさまでした。

次期大会（第6回、2007年度）は、

新 潟 大 学

初回案内は、ニュースレター本号18ページへ！

南国の春爛漫エクスカーション

渡邊加奈（東京大学）

2006年3月20日（月）、沖縄本島は前日までの学会疲れも吹き飛ばすような素晴らしいお天気に恵まれました。「日本食物分類学会」（注：バス会社側の間違い）と札の下がった大型バスは満員の盛況ぶり。道中、高速道路両脇の植生について興味深い解説を多数伺うことが

できました。一例としては沖縄本島の南北の地質の違いと植生の関係で、泥岩由来の土壌か否かがシイ・カシ林の発達に關与しているとのこと。石川岳に残る貴重な植物のお話等にも耳を傾けているうちに、最初の目的地である万座毛に到着しました。

万座毛は隆起サンゴ礁の海崖と広い芝生の景勝地として有名で、昔は合コンの場として使用されていたとかいないとか。絶景をお目当てに多くの観光客が訪れていました。そんな一般客を尻目に、参加者は岩塊上に発達する石灰岩植物群落の観察に勤しみます。前日のシンポジウムで話題に上ったニガナ属を始め、内地では見かけないオキナワマツバボタンやナンゴククサスギカズラといった草本にモンパノキやアダンの林、そして崖下に広がる群青色の海は亜熱帯情緒を醸し出し、南の島の植物の海流散布経路に想像は膨らみます。

万座毛を後にした一行は、次に勝山のトックリキワタの街路樹に立ち寄りました。トックリキワタはブラジル原産で11月中旬に美しい桃色の花を咲かせるそうですが、訪れた時は花も葉も無く、鈴なりの綿ボールが際だっていました。その不思議な光景に、思わず童心に帰りわらわらと車道に繰り出す面々。琉球大学の先生のお話では、この地のトックリキワタはオオコ



左：万座毛、右：安和岳と八重岳（撮影・渡邊加奈）

ウモリ媒花だとか。次回は是非オオコウモリの訪花の様子を見に訪れたいです。

嘉津宇岳周辺も稀にみる好天で、「幻!?の八重岳&嘉津宇岳」の全貌を目にすることができました。山麓は満開を迎えたオキナワジイが目立ち、辺りに漂う花香は明るい日差しと相まって初夏を連想させました。嘉津宇岳中腹の林床は薄暗く、ムサシアブミやセイタカスズムシソウが優占する中に、時折リュウキュウアリドオシの白色の花と朱色の実が光っていました。また、地元の方と学会長の木登りのお陰でリュウキュウマノスズクサの色変わり個体（貴重!）も見ることができ、個人的にも実りある登山となりました。

その後、名護市宮里に御嶽（聖域）として守られてきた大変立派なハスノハギリ林を観察し、名護大通りの巨大ガジュマルも見学。車窓に広がるタイモ（サトイモの2倍体で沖縄伝統野菜）の水田や、米軍基地とやんばるの森との関係のご紹介を受けつつ、那覇に戻りました。

このように、盛りだくさんのエクスカーションに大満足の一日を過ごすことができました。最後に、日本植物分類学会第5回大会の運営に加え、このエクスカーションの数々の手配に貴重な資料までご用意下さった大会関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。



左から、トックリキワタ、リュウキュウアリドオシ、リュウキュウマノスズクサ（撮影・渡邊加奈）

日本植物分類学会 2006 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 黒沢高秀

会場：八汐荘小ホール

日時：2006 年 3 月 17 日 16:00 ~ 19:00

参加者

評議員：() 内は被委任者 評議員出席 8、
委任状出席 2出席 (8 名): 秋山弘之、今市涼子、梶田忠、
高橋英樹、西田佐知子、藤井伸二、村上
哲明、綿野泰行欠席 (4 名): 植田邦彦、小菅桂子 (議長
に委任)、高宮正之、出口博則 (議長に委
任)

幹事会等：() 内は役職

出席 (10 名): 邑田仁 (会長)、黒沢高秀 (庶
務)、田中法生 (会計)、鈴木武 (図書)、
三島美佐子 (ニュースレター担当)、岡田
博 (編集委員長)、秋山忍 (和文誌編集)、
菅原敬 (植物分類学関連学会連絡会・日
本分類学会連合担当)、田村実 (講演会担
当)、伊藤元己 (植物データベース専門委
員会)欠席 (5 名): 加藤英寿 (ホームページ担当)、
西田治文 (自然史学会連合担当)、加藤雅
啓 (学会賞選考委員会)、矢原徹一 (絶滅
危惧植物・移入植物専門第一委員会)、柏
谷博之 (絶滅危惧植物・移入植物専門第
二委員会)

1. 評議員会開催にあたり、邑田会長から挨拶があった。
2. 黒沢庶務幹事により、定足数が確認された。会長・評議員出席 9、委任状出席 2 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として綿野泰行氏が選出された。議事録署名人として秋山弘之氏と村上哲明氏が選出された。

4. 報告事項

4.1 自然史学会連合関連報告 2005 年度
の活動報告。4.2 日本分類学会連合報告 第 5 回総会、
2006 ~ 2007 年度の代表および副
代表の選出、2006 年度の事業計画、
2006 年度公開シンポジウムの報告。4.3 植物分類学関連学会連絡会報告 合同
名簿の出版、連絡会主催シンポジウ

ムの準備状況の報告。

4.4 各種委員会に関する報告

(1) 編集委員会 英文誌『APG』、和文誌『分
類』の編集状況報告。副委員長職を作る
件について。(2) 学会賞選考委員会 第 5 回日本植物分
類学会賞の選考について。

(3) 植物データベース専門委員会

(4) 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員
会(5) 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員
会4.5 図書関連報告 雑誌の交換・寄贈の状
況について。

4.6 日本植物分類学会講演会報告

4.7 ニュースレターに関する報告 発行状
況、印刷業者、HP 掲載方法について。4.8 ホームページ関連報告 ホームページ
の更新状況について。

4.9 その他報告事項

(1) 情報学研究所との APG などの情報提
供の協定について 鈴木図書幹事から
NII-ELS の提携について説明があった。
APG などの非公開期間を 1 年とし、1
年目から 2 年目にかけて有料公開にす
ること、Abstract は無料公開すること
となった。(2) 雑誌の交換先について 鈴木図書幹
事から最近 (過去 5 年) 1 冊も送って
きていない交換先が多数あることが報
告された。各機関と連絡をとり、交換
先の現状について確かめることになっ
た。学会交換雑誌の管理に関して、学
会と兵庫県立人と自然の博物館の間で
寄託の正式な取り決めをする方向で進
めることになった。

4.10 会務報告 会員数など。

4.11 会計報告

5. 審議事項

5.1 2005 年度事業報告書 (案) について

黒沢庶務幹事より 2005 年度事業報
告書 (案) が提案され、いくつかの項
目について削除が行われた後、了承さ
れた。

- 5.22005 年度決算報告（案）について
田中会計幹事より 2005 年度決算報告（案）が提案され、了承された。
- 5.32006 年度事業計画（案）について
黒沢庶務幹事より 2006 年度事業計画（案）が提案され、いくつかの項目について追加、訂正、削除が行われた後、了承された。
- 5.42006 年度予算（案）について
田中会計幹事より 2006 年度予算（案）が提案された。収支について意見があり、会費値上げの可能性について質疑があった後、予算案は承認された。
- 5.5 奨励賞、論文賞および大会発表賞に関する規約の変更について
邑田会長から奨励賞、論文賞、大会発表賞の設立について、趣旨および経過の説明があった。学会賞についての細則（改定案）、学会賞選考規定（案）日本植物分類学会大会発表賞選考規定（案）、日本植物分類学会論文賞選考規定（案）について提案がなされた。奨励賞の制限年齢などについて議論が行われ、いくつかの点について追加、訂正、削除が行われた後、了承された。
邑田会長より、村上評議員に日本植物分類学会大会発表賞選考委員会委員長、評議員に委員を委託したいとの依頼があった。
- 5.6 会費滞納者の除名について
長期滞納者の除名処分について会計担当幹事から説明があり、7名の除名対象者が示された。3月31日付け除名が了承された。
- 5.7 その他
- (1) 第6回大会開催地について
邑田会長から地域等を考慮して新潟大学で開催することが提案され、了承された。
 - (2) 野外研修会予定について
邑田会長から種子島で開催することが提案され、了承された。
 - (3) 講演会予定について
田村担当幹事から12月ごろに大阪学院大で開催することが提案され、了承された。
 - (4) 科学研究費補助金（基盤研究等）の審査委員候補者の情報提供について
時間の都合から、次回の評議員会に審議することとなった。
 - (5) 次期会長・評議員選挙について
高橋英樹氏が会長から選挙管理委員会委員長として指名された。
 - (6) やんばるの米軍演習場へのヘリパッド移設問題への要望書、および恩納村に建設予定の科学技術大学院大学の建設予定地にかかる要望書について邑田会長から説明があった。日本植物分類学会から要望を出す場合、メール評議員会で議決し、会長名で要望を出すことになった。
 - (7) 総会議事について
総会の議事次第について黒沢庶務幹事より原案が出され、いくつかの訂正の後に了承された。

日本植物分類学会第5回大会総会議事抄録

庶務幹事 黒沢高秀

会場：琉球大学大会館

日時：2006年3月18日12:20～13:20

1. 総会に先立ち邑田会長から挨拶があった。
2. 総会に先立ち横田昌嗣大会会長より挨拶があった。
3. 今市涼子氏が議長に選出された。
4. 報告事項
 - 4-1 会務報告
前年度の事業報告と決算報告が、黒沢

庶務幹事と田中会計幹事よりそれぞれ行われた。最近逝去された学会員に対して黙祷が行われた。

4-2 各委員会からの報告

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
矢原委員長より植物 RDB 見直し調査の進捗状況について、現時点での解析結果も含めて説明がなされた。
- ・植物データベース専門委員会
伊藤委員長より委員会の前年度の活動報告がなされた。

- ・学会賞選考委員会
加藤委員長より、第5回日本植物分類学会賞が西田治文氏と中藤成実氏に決定したことが報告された。
5. 審議事項
- ・第一号議案 2005年度事業報告書並びに2006年度事業計画承認の件
黒沢庶務幹事から上記2件について説明があった。吉田監事より、適切に運営が行われているとの会務監査の報告がなされた。審議の結果、異議なく了承された。
 - ・第二号議案 2005年度決算報告書並びに2006年度予算承認の件
田中会計幹事から上記2件について説明があった。芹沢監事より、適切に会計が行われているとの会計監査の報告がなされた。審議の結果、異議なく了承された。
 - ・第三号議案 奨励賞、論文賞および大会発表賞の新設について
邑田会長より奨励賞、論文賞および大会発表賞の新設と、「学会賞についての細則(改定案)」、「学会賞選考規定(案)」、「日本植物分類学会論文賞選考規定(案)」、「大会発表賞選考規定(案)」が提案された。受賞者の人数について質問があった後、挙手による採決の結果、賛成多数で了承された。
6. その他
- 6-1 第6回大会開催地について
邑田会長より、次回大会を新潟大学に於いて開催することが提案され、了承された。
 - 6-2 野外研修会予定について
邑田会長より、種子島で開催することが提案され、了承された。
 - 6-3 情報学研究所とのAPGなどの情報提供の協定について
鈴木図書幹事から、NII-ELSの提携について説明があった。今後、1年目から2年目にかけて有料公開し、Ci-NIIでAbstractを無料公開する方針であることが説明された。
 - 6-4 会費滞納者の除名について(会計幹事)
長期滞納者の除名処分について会計担当幹事から説明があり、7名の除名対象者の3月31日付け除名が了承された。

2005年度事業報告と2006年度事業計画について

庶務幹事 黒沢高秀

ニュースレター No. 20 に掲載した 2005 年度事業報告(案)は評議員会で(4)の第2項目と第3項目を削除した後、評議員会と総会で承認されました。また、2006年度事業計画(案)については、評議員会で若干の改訂が行われた後、評議員会と総会で承認されました。事業計画(案)からの改訂点をご報告致します。

2006年度事業計画(案からの改訂点)

(3)委員会活動：以下の項目を追加する

- ・大会発表賞選考委員会
 - ・論文賞選考委員会
- (4)表彰：以下のように改訂する。
- ・日本植物分類学会奨励賞、論文賞、大会発表賞を新設する。
 - ・第5回(2006年度)日本植物分類学会賞の授与を行う。
 - ・日本植物分類学会第5回大会発表賞の授与を行う。

学会賞についての細則の変更および学会賞、大会発表賞、論文賞に関する選考規定の新設について

庶務幹事 黒沢高秀

総会と評議員会で上記の細則の変更および規定の新設が承認されました。変更された細則および新設された選考規定を掲載します。

学会賞についての細則

第1条 学会賞は会則第4条(4)に基づき、調査および研究業績を通じて、本会の発展

にめざましい貢献をなした会員を顕彰するために授与する。

第2条 学会賞は「日本植物分類学会賞」、「日本植物分類学会奨励賞」、「日本植物分類学会大会発表賞」および「日本植物分類学会論文賞」の各賞からなるものとする。

第3条 学会賞のうち、「日本植物分類学会賞」と「日本植物分類学会奨励賞」については、

自薦、他薦を問わず推薦された会員の中から、学会賞選考委員会により選ばれた者に授与する。「日本植物分類学会大会発表賞」については自薦の大会発表者の中から、「日本植物分類学会論文賞」については当学会の雑誌の論文公表者の中から、それぞれの賞の選考委員会によって選ばれた者に授与する。

第4条 各学会賞選考委員会は、会則第14条(1)の3に準じて設ける。

(1) 日本植物分類学会賞選考委員会は会長が委嘱する委員長および若干名の委員により構成し、「日本植物分類学会賞」と「日本植物分類学会奨励賞」の受賞者を選考する。委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(2) 日本植物分類学会大会発表賞選考委員会は、会長と会長が委嘱する委員長および若干名の委員により構成し、「日本植物分類学会大会発表賞」の受賞者を選考する。

(3) 日本植物分類学会論文賞選考委員会は編集委員長が委員長を務め、会長が委嘱する若干名の委員と共に委員会を構成し、「日本植物分類学会論文賞」の受賞者を選考する。

第5条 大会において学会賞の受賞者の表彰を行う。

第6条 その他受賞者の選考に必要な事項は別に定める選考規定による。

附則 本細則は2001年5月12日より実施する。

附則 本細則は2002年3月16日より実施する。

附則 本細則は2006年3月18日より実施する。

学会賞選考規定

第1条 この規定は「学会賞についての細則」に基づき、各賞の受賞者の資格および選考のための手続きを定めるものである。

2. 「日本植物分類学会大会発表賞」および「日本植物分類学会論文賞」については別に日本植物分類学会大会発表賞選考規定および日本植物分類学会論文賞選考規定で定める。

第2条 「日本植物分類学会賞」は植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められたものに授与する。受賞者の資格は、「日本植物分類学会賞」については10年以上継続して本会会員である者とする。

2. 「日本植物分類学会奨励賞」は受賞年の4月1日において満38歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な研究者(学生を含む)に授与する。受賞者の資格は3年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している者とする。

第3条 受賞者の数は原則として「日本植物分類学会賞」2名、「日本植物分類学会奨励賞」若干名とし、受賞者には賞状および副賞を授与する。

第4条 受賞候補者の募集は会長がニューズレターに公告して行う。

第5条 学会賞に応募するものは所定の申請書および資料を提出しなければならない。

第6条 日本植物分類学会賞選考委員会は受賞者を選考および決定するものとし、選考委員会は選考の結果を会長に答申するものとする。

第7条 「日本植物分類学会賞」と「日本植物分類学会奨励賞」の受賞者は大会において記念講演発表を行うことができる。

第8条 この規定を変更する場合は評議員会の承認を得なければならない。

附則 本規定は2006年3月18日より実施する。

日本植物分類学会大会発表賞選考規定

第1条 この規定は「学会賞についての細則」に基づき、日本植物分類学会大会発表賞の受賞者の資格および選考のための手続きを定めるものである。

第2条 「日本植物分類学会大会発表賞」は本学会大会において優れた研究発表をした筆頭発表者に授与する。

第3条 受賞発表の数は毎年若干数とし、大会において賞状を授与する。

第4条 日本植物分類学会大会発表賞選考委員会は受賞発表を選考および決定するものとする。

第5条 この規定を変更する場合は評議員会の承認を得なければならない。

附則 本規定は2006年3月18日より実施する。

日本植物分類学会論文賞選考規定

第1条 この規定は「学会賞についての細則」に基づき、日本植物分類学会論文賞の受賞者の資格および選考のための手続きを定めるものである。

第2条 「日本植物分類学会論文賞」は「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」または「分類」に優れた研究成果を発表した者に授与する。

2 受賞者は受賞論文の著者全員とする。

第3条 受賞論文の数は毎年若干数とし、大会において各論文の代表者に賞状を授与する。

第4条 日本植物分類学会論文賞選考委員会は受賞論文を選考および決定するものとし、選考委員会は選考の結果を会長に答申するものとする。

第5条 この規定を変更する場合は評議員会の承認を得なければならない。

附則 本規定は2006年3月18日より実施する。

初代大会発表賞の受賞者決定！

第一回大会発表賞選考委員会委員長 村上哲明

日本植物分類学会大会発表賞を新設することが2006年度の総会で認められた。その結果、評議員会で大会発表賞の担当を仰せつかっていた私が第一回の選考委員会・委員長を務めさせていただくことになった。とても光栄なことである。今回、口頭発表賞とポスター賞にそれぞれ、16名と18名のエントリー者があった。ポスター賞で大会当日、2名が説明に発表会場まで来られずに辞退となったので、実際のポスター賞のエントリー者は16名であった。エントリー資格を「常勤の研究職に就いていない若手研究者（年齢制限は特になし）」としていたが、十分な周知ができていなかったようである。もちろん、資格のない方には事前に辞退していただいた。上記のエントリー者数に資格のない方は含まれていない。

さて、受賞者の選考に当たっては、選考委員会は公平かつ厳正に適切な人を選ぶべく最大限の努力をしたつもりである。その結果、審査員をしていただいた10名の方々には、とても大きな心労をおかけし、さらにポスター発表においては候補者以外のポスターをゆっくり見る暇もない状況にしてしまったようである。委員長として審査員の皆様には深

くお礼を申し上げたい。

今回の審査方法は、発表している研究の内容そのものの学問的価値を5点満点（最低点が1点）、発表のうまさも3点満点（最低点が1点）でそれぞれ採点して、それらの合計点を評点とさせていただいた。また、審査員が共著者に入っている発表、あるいはそれに準じるような立場にある発表については審査からはずれていただいた。そして、エントリー者ごとに審査員の評点の合計を出し、それを実際に審査した審査員の数で割った「審査員あたりの評点の平均点」で、口頭発表賞とポスター発表賞のそれぞれ上位2者を受賞者とした。このようなやり方で、今回、実際にも適切なものが選ばれたと私達は信じている。

具体的な審査方法については、まだまだ改善できる箇所はあると思うので、今しばらくは色々試行錯誤が必要であろう。それでも、大会発表賞を設けることで、例えば口頭発表の質は劇的な向上が見られたと私は思っている。さらに大会発表賞を受賞したことが就職や学振の特別研究員の申請などにおいて有利に働き、その結果として受賞者の研究がますます発展していくことを切に願っている。そうなることで、この大会発表賞がさらに権威あるものとなっていくと考えるからである。



大会発表賞授賞式風景（撮影・横田昌嗣）



喜びの笑みがこぼれる受賞者の面々
左から、大村、有川、海老原、高山各氏（撮影・梶田 忠）

初代大会発表賞受賞者 独占インタビュー！

編集人（以下、編）：こんにちは。先の日本植物分類学会沖縄大会では、大会発表賞の受賞、おめでとうございます。まず、簡単な自己紹介をお願いいたします。

大村氏（以下、大）：この度は、ありがとうございます。大会委員の方々をはじめ、発表を聴いて下さった方に改めてお礼申し上げます。現在、私は国立環境研究所で「地衣類の遺伝的多様性を活用した大気汚染診断」というプロジェクトのポスドクフェローをしています。ここ数年は、「地衣類の菌と藻の組合せはどのようにして決まるのか？」に焦点を当てて、これを遺伝子レベルでの多様性解析によって解明しようとしています。組合せについて調べていくと、栄養繁殖の実体、菌と藻の間に共進化は起こっていないこと、しかし特異性はあること、環境ストレスに対する影響など、多くの興味深い事実が分かってきました。発表ではこれらの内容を詰め込んで盛りだくさんになってしまいましたが、面白いと思って頂けて大変うれしいです。

海老原氏（以下、海）：3月の学会時には東大大学院・総合文化研究科のD3でした海老原淳です。4月より筑波の科博・植物研究部へ移りました。学生最後の月に大会発表賞をいただいてしまったことになりました。この賞の新設趣旨を考えると、果たして私がいただいてしまって良かったのか、未だに少々申し訳ない気がしていますが、大変ありがたく思っています。

最後に、第一回大会発表賞・受賞者は以下の通りである（50音順）。

口頭発表賞

- ・海老原淳（東大・総合文化・広域システム）「標本情報を活用した日本産ハイホラゴケ群（コケシノブ科）の分類学的再編」
- ・大村嘉人（国環研）「ウメノキゴケにおける共生藻選択の進化・生態学的意義」（発表時の演題名は、「ウメノキゴケにおける地衣類と共生藻の多様な組合せとその進化的意義」）

ポスター発表賞

- ・有川智己（慶應大・生物）「複数の葉緑体遺伝子によるナンジャモンジャゴケ類の系統解析」
- ・高山浩司（東大・理・附属植物園）「マイクロサテライトマーカーを用いた汎熱帯海流散布植物オオハマボウ（アオイ科）の遺伝子流動の解明」

有川氏（以下、有）：慶應義塾大学経済学部助手（嘱託）の有川智己です。専門はコケ植物の系統・分類学です。なんで経済学部なの？とよく言われます。うちの大学では、文系の学生向けに「実験を重視した自然科学教育科目」が開講されていて、文・経・法・商4学部の学生が毎年1500人程度、生物学を履修しています。

編：1500人！

有：講義を行う専任スタッフが10人、学生実験に携わる助手が5人もいますけど、植物をやっている人は自分をいれて2人だけです。僕のような助手はすべて「嘱託」となっていて、1年ごとの契約更新で、最長でも5年まで。私は現在3年目に入りました。

大：私もポスドク生活3期目です。今回エントリーした若手の中ではかなりの古手ですね（笑）。

高山氏（以下、高）：僕は、千葉大学理学部生物学科でポスドクをやらせてもらっています、高山浩司です。受賞当時は東京大学大学院理学系研究科附属植物園で博士課程の学生でした。地理的なスケールはだいぶ違いますが、汎熱帯海流散布植物や大洋島固有種の分化に興味をもって研究を進めています。



編：さて、まずは皆さんにお伺いします。今回の大会発表賞にエントリーするにあたり、

- 最初から受賞を目指して準備に望まれたのでしょうか？
- 高**：はい。博士課程最後の良い思い出になればと、気合いを入れて準備しました。
- 大**：私も、発表申込をしたときは、意気揚々と受賞を目指していました。しかし発表練習を職場の方に見て頂いたら、「何を言っているのか分かん」と言われ、大会が近づいた頃には、当初の意気込みはかなり減っていました。その後、大会までの準備では、とにかく内容が伝わるようにしようと、原稿をなるべくシンプルにする作業をしていました。
- 有**：僕も、実はかなり意識していました(笑)。せっかく発表するのだから、わかりやすい、興味を持たれるポスターをつくって、受賞を目指そうと思ってました。1月、学生実験も一段落した頃から、成績処理と入試作業の合間に、受賞を目指してデータを出したり解析をしたりしましたが、最初に思っていたほど明快な系統樹にならず、2月末くらいにはいったん諦めました……。でも、最後の1週間くらいで、せめてポスターは分かりやすいものにと、かなり努力し試行錯誤しました。
- 海**：僕の場合、発表賞とは無縁な内容だと思っていますので、まったく何も考えていませんでした。応募条件は満たしていたので、「せっかくなので」ということで○をつけたというのが正直なところです。
- 編**：皆さん、それぞれですね。スライドやポスター作成にあたり、特に気をつけたり工夫した点は？
- 有**：文章やデータをだらだらと書き連ねたり載せたりするポスターにだけはすまい、と思っていました。ポスターの前を通りかかった人が、大きな文字で箇条書きにしてあるところを目でおっていただけでも、全体の話の筋はわかるようにしようと思いました。話が複雑で、コケ植物の大分類の問題点と、RNA 編集という現象について分かっていないとおもしろくないので、背景の説明にはスペースを思い切って使いました。
- 大**：図や説明のアレンジで私がイメージしているのは、中学校や高校の教科書にあるような図説です。教科書の図というのは、よく分かるように工夫されているじゃないですか。今回はスライドでしたが、ポスターでも大体同じスタイルでやっています。
- 高**：僕は、早めに準備を始めました。結果をできるだけ簡潔に示すように心掛けました。
- 海**：質問の答えではないんですが、「パワーポイントのファイルを一週間前までに郵送」というシステムは時代に逆行しているので、早急に改善して欲しいですね。OHP を使っていた時期よりも、実質的なスライド作成縮切りが繰り上がっているわけですし、ファイル郵送後に発表練習をすればするほどスライドの間違いを数多く見つけてしまう皮肉な結果になります。当日のファイル提出で予期せぬトラブルが起こるのを恐れているのはわかりますが、ならば「数日前までにサーバにアップロード」できるようにするなど、それ程難しくない改善が可能だと思います。
- 編**：確かに。当日パワポを修正する時間を設けたりしてもらえてもありがたいですよ。海老原さんと大村さんは、オーラル発表の仕方特に気をつけたり工夫された点は？
- 大**：イントロで興味を失われると、聴いてもらえなくなるので、そこは特に気を付けています。なるべく、大きくてインパクトのある話から入って、自分の研究へ導くようにしています。今回は“インパクト”のある雑誌として有名な Nature や Science の話題を最初に引用してみました。
- 海**：質疑応答があってこそ口頭発表だと思うので、いつもなるべく質疑応答の時間を長く残すように努力しています。色々な方の発表を拝見していると、突っ込みどころ満載の発表に限って発表のみで時間オーバーして質問時間なし、という傾向があるようです。
- 編**：作成や発表にあたり、参考にした how to 本とかウェブサイトはあるんですか？
- 一同**：ありません。
- 海**：そんなたいそうなことはしていません(笑)。
- * * *
- 編**：これまでポスターやオーラル発表を見聞してきて、印象に残ったり、目標にしたと思った、すばらしいと感じたりした方は？
- 海**：・・・うーん、急には思い浮かびません。ということは、あまり印象に残っているものがないということかもしれません。

有:ポスターは、その場で「いいなあ」とか思っても、発表者とポスターが結びつかなくて、結果として記憶に残らなかったりするんですよ。

大:私は、深津武馬さん(産業技術総合研究所)。深津さんとは面識はないのですが、今まで私が見てきた中では、研究発表内容・技術ともにズバ抜けています。発表内容が盛りだくさんで次々と話が展開していくのですが、テロップを活用しながらメリハリをつけて発表しています。「なぜなんだ?」「へえ~なるほど!」と人を引き込んでいくストーリー展開、分かりやすさ、スライド作成などとても上手で、大変インパクトのある発表をされています。

高:L.H. Rieseberg. IBC 2005 の発表を聞きました。発表の随所に、アメリカンジョークがちりばめられていて、親近感を感じました。あとは、自分の卒研発表(2001)。よくもまあ、偉そうに、堂々とやっていたなあと感じる。でも、“研究が楽しい”というオーラは出ていたと思うので、いつまでもその気持ちは忘れずに、これからも邁進していきたいです。

編:いいですね。Rieseberg のような大物になれそうだなという予感ですね(笑)。ところで、プレゼンバリアフリーについては、今回の発表ではどうされましたか?

有:色を多用したグラフや図表を作るときには、web ページなどを活用して、チェックをしますが、今回は系統樹や文字が主体だったので、濃淡をはっきりさせるなど気をつけたくらいです。

大:私は今回は特に配慮はしませんでした。

高:したかったけど、あまりできませんでした。

海:僕はかなり配慮しました。「コントラストを強く」というのを意識しすぎたばかりに、一般の方には「目がチカチカする」とかえって不評で、大変失礼しました。なかなか配慮は難しいものだと思います。最近のプロジェクトは個人の環境に比べて明度が高いため、会場で実際に写すと予期しない結果になって焦ることがあります。このあたりの対策はなんとかならないものでしょうかねえ。



編:さて、今回の学会発表賞の新設は、大会参加や発表準備への意欲の向上に結びつきました?

高:はい。当たり前かも知れませんが、いつも以上にポスターを見に来てくれる人の視点を気にしながら、発表準備に望めました。空港でポスターの筒を持ち、気を引き締め待機していたら、「もしかして、八重山商工の人?(甲子園の)抽選会に行ってたの?」と知らないおじさんに声をかけられました(笑)。

編:緊張した面持ちが、試合に臨む選手に通じるものがあったんですね(笑)。

有:僕も、発表準備への意欲向上には結びつきました。わかりやすく、見やすく、という意識はつよく持ちました。

大:日本植物分類学会には様々な研究材料を扱っている方がいらっしゃるでしょう。今回、学会発表賞が新設されたことで、様々な研究分野の方から自分の研究や材料の面白さが伝わるかどうかを評価してもらえる機会ができたわけです。特に口頭発表の部があるのは面白いと思います。ポスター賞は他の学会でもよく聞きますが、口頭発表に対する賞は多くはないと思います。大会参加申込の際に大変良い刺激になりました。

海:僕の場合、どちらともいえないです。賞のあるなしにかかわらず、学会には定期的に参加して定期的に発表するような研究ペースを維持していきたいものです。

編:今後の日本植物分類学会大会賞に望むものは?

大:発表者全員に審査員からの点数およびコメントを教えて頂けると、今後の研究発表の参考になると思います。

有:僕も、「こうするとさらによい」「こうしたほうがよい」というような、審査員からのアドバイスが、応募者に伝えられるような形式になるといいと思います。

高:若い世代の学会参加にも繋がると思いますので、これからも継続して行って欲しいです。



編:今回受賞された研究の今後の発展や豊富について、是非アピールして下さい。

海:今回の発表内容は、発表済みの分子データ等を用いた研究結果を利用した「純粋な分類」にこだわってみました。さらに、一見するとサイエンスとは無縁のように見える「資料のデータベース化」が、生物学の研究に如何に貢献するのかという実例をアピールするというのが第二の目的でした。

現在僕の立場は「資料のデータベース化」を自らの業務として推進しなくてはならないものに変わりました。データベース化に対しては、一般的になかなか腰が上がらないものですが、「資料のデータベース化によって飛躍的に生物学の研究が進化した」という研究例を積み上げることによって、多くの方々にその価値を認めていただき、資料の共有化を促進したいと思っています。

大:「共生藻はどのようにして選択されて定着していくのか？」という問題に対しては、今回発表した生態的なアプローチに加えて、形態的・生理的な観点からも菌と藻の両者の適合性について調べていく必要があります。また、これらの理解が進むことによって、共生に関わっている分類形質の機能や意義が明らかになっていくことも期待されます。

有:僕は、さらにデータを蓄積し、信頼のおける系統樹を構築します。ナンジャモンジャゴケ類が、初期陸上植物の進化を考える上で系統的に重要な位置にあることが示されると思います。ナンジャモンジャゴケ類や他のコケ植物の形態、発生に、注目が集まることになると思います。

高:僕は、汎熱帯海流散布植物のオオハマボウと近縁種を用いた系で、さらに解析を進め、個体間・集団間・海洋間・種間の遺伝的構造を階層的に把握することで、全地球レベルでの分散過程、集団間の遺伝子流動の実態について明らかにしていきたいです。また、GIS (Geographic Information System) を応用することで、「海流の流れ」「古海流の流れ」「地理的障壁の有無」「緯度経度」などの地理的要因と遺伝子流動との関連についても解析を進めていきたいと考えています。

* * *

編:皆さんは自動的に、来年の大会発表賞の審査員になります。そこで最後に、来年エントリーする皆さんへ、アドバイスやメールをお願いいたします。

有:自分が他人のポスターを見るときに、どういう風に見ているかを、よく考えて自分のポスターを作ることが大事だと思います。

自分の研究と密接に関係していない限り、文字やデータがずらずら並んだだけのポスターなんか、よく読みはしませんよね？ひとまずは人に「おおっ？おもしろそう」と思ってもらえるように、そして、ちょっと立ち止まっただけの人が、ざざっと斜め読みしたときに、だいたいの話の流れが分かるように、大きな文字を使って、ストーリーを意識することが大事だと思います。発表すればいいや、とか、間違いを指摘されなければいいや、という逃げの考えに陥らず、失敗を怖れず大胆にチャレンジすることが必要ですよ。発表会や学会、ゼミなどで、質の高い発表を多く耳にし、目にもすることも大切だと思います。

大:可能ならば口頭発表でエントリーされることを勧めます。多くの方に発表を聞いてもらえるし、顔を覚えてもらえると思います。エールを送るというよりも、お互いの良い点を伸ばし合ったり、改善点も気兼ねなく議論したりできるような、そんな学会の雰囲気作りを皆さんと一緒に今まで以上に盛り上げていけたらと思っています。今後ともよろしくお願ひします。

高:エントリー資格がある人は、是非とも応募してください。新潟でおいしい日本酒を飲みましょう！！

海:今年はちんすこうを賞品でいただきました。来年応募される方は笹団子を目指して是非がんばってください！

(※編注：今年度の賞品は、大会委員長のご厚意によるものでした。来年度の新潟大会で必ずしも賞品が出るとは限らず、また賞品が出ても笹団子とは限りませんので、ご注意下さい(^_^))

編:皆さん、お疲れ様でした。お忙しいところ、最後までおつきあいいただき、本当にありがとうございました。皆様の研究の、ますますの御発展をお祈りしております。また、今後の日本植物分類学会の大会発表賞の存続と発展を、皆で支えていきましょう！

※このインタビューは、座談会風に構成されていますが、実際はそれぞれの受賞者の方に回答していただいたメールアンケートを元に構成しなおしたものです。構成上、いただいた回答に改変を加えている場合がありますが、本質を損なわないようにしてあります。再構成と改変については、回答くださった受賞者の皆様に内容を確認頂いた上で、了解を得ています。(編)

2005 年度自然史学会連合総会報告

自然史学会連合担当委員 西田治文

自然史学会連合総会は、2005 年 12 月 10 日(土)に国立科学博物館自然史研修館(新宿)において開催された。鎮西代表が病欠のため代理として西田運営委員より開会の挨拶があった。藤井伸二氏(種生物学会)を議長に選出した。以下は同総会議事録の抄録である。

＜報告事項＞

1. 出席団体数：23 団体と 6 団体の委任状により計 29 団体(規定数 37 団体数の 3 分の 2 以上)の出席が確認された。
2. 運営委員会・意見書：17 年度は 4 回の運営委員会を開催し、会議内容の概要を説明した。学術会議の「理科離れ問題特別委員会」と環境省「外来生物法」に連合から意見書を提出した。
3. 講演会の開催：2005 年 11 月 20 日に大阪市立自然史博物館において平成 17 年度自然史学会連合講演会「科学への入口“自然史”-第一線の専門家が語る 10 のとびら-」を開催した。大阪市立自然史博物館・西日本自然史博物館ネットワークとの共催で行われ、参加者数が 210 名に達した。その他概要について説明した。
4. 博物館部会：博物館部会は神奈川、茨城、千葉、東大、大阪、琵琶湖、兵庫より 10 名の代表を選出して部会を組織しているが、今年度は時間の関係で会合をもつことができなかった。
5. ホームページ：維持管理は 2002 年から月 2 万円で業務委託を行い、今年度も連合の活動報告、加盟学協会の行事の広報、エッセイ、ギャラリーの記事を掲載した。
6. 自然史教育展開プログラム：自然史研究・教育の活性化のため、優秀な研究者を地域博物館、学校の教育強化のために派遣し実習を行う方針であったが、昨年度総会から懸案であった妥当な開催場所や方法を見つけられず、実施できなかった。
7. 加盟学会からの報告事項：特になし。

＜審議事項＞

1. 2004 年度会計決算の承認：会計担当欠席のため、庶務が代理で会計報告を行った。2004 年 4 月 1 日～2005 年 3 月 31 日の決算案が示され、質疑応答後に承認された。シンポジウム開催費(印刷費、演者謝金旅費、ポスター印刷および郵送費)、ホー

ムページ維持管理費および事務経費の詳細が説明され、次のような質疑があった。(1) 事務経費には、代表および運営委員の旅費が含まれているが、旅費と事務経費を独立に計上すべき。(2) 分担金の収入が合計金額の提示のみでは明確ではないため、分担金を納入した学会の明細を示すべき。(3) 収入の予算案と決算が一致しない点を用語を工夫して明確にすべき。これらの意見を受け、来年度から改善することにした。

2. 監査報告：会計監査より決算が適切に処理されていることが報告された。会計監査 2 名が欠席のため、書面での報告を議長が読み上げ、承認された。
3. 2005 年度会計経過報告：2005 年度の会計経過が報告され承認された。2005 年度連合講演会の要旨集印刷代が未払いであること、2003 年度通信費が未処理であったため、今年度会計で処理したことなどが説明された。分担金未納の団体が複数あることが示され、会計より督促を行うことを報告した。
4. 2006 年度予算案：2006 年度の暫定予算案が示され、承認された。
5. 連合ホームページの運営：現状の業務委託費が高すぎるのではとの質問を受け、その根拠を説明した。契約では月 10 回更新(1 回当たり 2 千円)であるが、今年度の更新の頻度は月 1 回程度と低く、現状では高い金額を払っている傾向にあることを運営委員会から報告した。また年間を通してこれ以下金額での契約は困難であることを説明し、ホームページの適切な維持運営については運営委員会で検討することにした。
6. 2006～2007 年度代表選挙：加盟学協会と運営委員会から池谷仙之、斎藤靖二、西田治文の 3 氏の推薦があった。選挙の結果、西田氏 11 票、斎藤氏 9 票、池谷氏 3 票で西田氏が次期代表に選出された。
7. 2006～2007 運営委員候補：森田・上田・野村・篠原・海部・出川・山田の各運営員候補者が現運営委員会より紹介された。科博に所属する候補の比率が高すぎるとの指摘をうけ、代表が追加指名する 3 名程度の委員を科博に集中させないことで了承された。
8. 学会施設使用料について：学会施設使用料に関する意見書案について説明があった。賛同学協会や具体的事例について情報提供をお願いした。

総会終了後、討論会「自然史学会連合の意義

とその未来」(15:10～16:30)を行った。尾本恵市氏(連合顧問)と黒岩常祥氏(学会協議員)からそれぞれ連合の歴史や設立目的、学会協議の現状や対外報告書の効力などについてお話を伺い、社会の中における自然史研究の現状や連合の方向性について議論を行った。また科博の事務局機能の充実について意見がだされた。

2006年度は、博物館部会とホームページに力を注ぐと共に、シンポジウムは昨年度同様に東京以外で開催し、各学会の宣伝コーナーも引き続き充実させることとなった。本学会も昨年度はポスターと書籍等の紹介、絵はがき販売、入会案内のコーナーを設置し、1名の新会員増があった。今年度は11月11日～12日にシンポジウムと総会を開催する予定。

2006年度第1回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 黒沢高秀

2006年3月24～25日に2006年度第1回メール評議員会が開催されましたので議事抄録を報告します。この会議は、要望書の提出期限が迫っていた関係上、評議員会で予告していたことをよりどころに、短期間に行われました。このため、慣例では回答無しを白票として扱っておりましたが、今回はそのまま回答無しとして集計しております。この会議の結果を踏まえ、3月25日付けで「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業(仮称)に係わる環境影響評価図書案」に関する意見書を佐藤勉那覇防衛施設局長宛に提出しました。16ページに提出した意見書を引用します。

開催日時：2006年3月24日～3月25日16時
開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議
参加者：評議員全員

議長および議事録署名人選出

議長として邑田仁氏が選出された。

議事録署名人として梶田忠氏と藤井伸二氏が選出された。

審議事項

- 1) メール評議員会の開始について
- 2) メール評議員会終了の時間について
- 3) 当該の「環境影響評価図書案」に関して分類学会会長名で要望書を提出することについて
- 4) 要望書の内容に関して、添付の要望書(案)を原案とし、評議員から出された意見をもとに修正を会長に一任することについて

審議結果

4議案は承認10、非承認0、回答無し3で、承認された。

2006年度第2回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 黒沢高秀

2006年4月7日～10日に2006年度第2回メール評議員会が開催されましたので議事抄録を報告します。この会議は、要望書の提出期限が迫っていた関係上、あらかじめ評議員会で予告していたことをよりどころに、短期間に行われました。このため、慣例では回答無しを白票として扱っておりましたが、今回はそのまま回答無しとして集計しております。この会議の結果を踏まえ、4月10日付けで「沖縄科学技術大学院大学(仮称)整備事業に係る環境影響評価準備書」に関する意見書をシドニー・ブレナー独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構理事長宛に提出しました。17ページに提出した意見書を引用します。

開催日時：2006年4月7日～4月10日12時
開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長および議事録署名人選出

議長として邑田仁氏が選出された。

議事録署名人として梶田忠氏と高橋英樹氏が選出された。

審議事項

- 1) メール評議員会の開始について
- 2) メール評議員会終了の時間について
- 3) 当該の「環境影響評価準備書に関する意見書【案】」に関して分類学会会長名で意見書を提出することについて
- 4) 意見書の内容に関して、添付の意見書(案)を原案とし、評議員から出された意見をもとに修正を会長に一任することについて

審議結果

4議案は承認8、非承認0、回答無し5で、承認された。

平成 18 年 3 月 25 日

那覇防衛施設局長
佐藤 勉 殿日本植物分類学会
会長 邑田 仁「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業（仮称）に係わる環境影響評価図書案」
に関する意見書那覇防衛施設局の「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設事業（仮称）に係わる環境影響評価図書案」
に関して下記の通り意見書を提出します。

今回の事業で沖縄島北部のいわゆるヤンバル地域の福地川・宇嘉川・新川流域の計 6ヶ所に直径 75m のヘリパッドを建設（移設）し、これに付随して総延長約 1.5km の進入道路を建設する計画が広告縦覧されました。2002 年に公表された「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設に係る継続環境調査検討書」と比べると、事業計画の規模や内容が多少変更されているものの、事業の実施が生物相や生態系に与える影響は依然として重大だと思われます。この一帯は特異な生物相を誇る「ヤンバルの森」の中でも、固有植物種や国内での自生地が限られる植物種が集中するきわめて重要な地域であり、当学会としては移設計画の全面的な見直しあるいは大幅な計画の縮小を要望します。

琉球列島はアジア大陸の東縁に位置し、地質時代を通じて何度も大陸とつながったり離れたりした特異な地史をもつため、大陸から渡ってきた生物が取り残されたり、新たな進化をとげたりして、世界中でもここだけにしかみられない数多くの動植物が分布しております。その琉球列島の動植物相の中核的な位置を占めるのが沖縄島北部に広がる「ヤンバルの森」です。

「ヤンバルの森」は、オキナワジイとオキナワウラジロガシを主体とする世界でも稀な亜熱帯雨林ですが、そのなかでも建設予定地一帯は山地から海岸まで連続した植生がよく保たれ、「ヤンバルの森」本来の、大径木の多い成熟した林分や、海岸段丘上の風衝地に発達する低木林が見られる地域です。図書に掲載されたリストの中には、環境省または沖縄県のレッドデータブックで絶滅の恐れがあると判定された種が、維管束植物で 101 種、コケ植物で 31 種、藻類で 2 種含まれています。このうちの 2 種は種の保存法で指定された国内希少種であり、16 種は「ヤンバルの森」の固有種（亜種・変種を含む）であり、建設予定地一帯が「ヤンバルの森」はもとより、琉球列島の植物相の特性を語るうえで欠くことのできない重要な地域であることが明らかになっています。今回公表された調査結果では 776 種の維管束植物、290 種のコケ植物、184 種の藻類の分布が確認されていますが、その中にはウスギムヨウランやアワムヨウラン等の沖縄県新記録種が含まれており、今回の図書のリストには欠けているものの、事業地域内からは未記載のヤンバル固有種が確認されていることから、今後も調査や研究が進めば、この地域の学術上および保全上の価値は一層高まるものと予想されます。

ヘリパッドや進入道路の建設は、必然的に森林伐採や赤土砂の流失を伴います。森林伐採については、実際の伐採面積よりはるかに広い範囲に影響を及ぼすものであり、たとえば事業地域に隣接する国頭村美作の沖縄やんばる海水揚水発電所周辺では、進入道路と施設周辺の林縁部分からの森林の枯れ込みと荒廃が進んでいることから、今回の事業によってさらに大きな影響が予想されます。また、赤土砂の流失は、流失自体が問題であるばかりでなく、流失した赤土砂が谷に流れこんで広い範囲を汚染し、生物の生存を脅かすものです。上記の絶滅の恐れのある植物の多くは自然林の林内や溪流沿いの岩上などに生育しているため、ヘリパッドや進入道路の建設はヤンバルフモトシダ、オオギミシダ、クニガミヒサカキ、コバノミヤマノボタン、タイワンアサマツゲ、シマイワウチワ、オキナワヤブムラサキ、ヤナギバモクセイ、クニガミシスラン、オキナワセッコク等の自生地を消失させる恐れがあります。また、溪流沿いに限って生育するヒメミゾシダ、コケタンポポ、アオヤギバナ、オオシロシヨウジョウバカマ、コシヨウジョウバカマ、クニガミトンボソウ等の生育に悪影響を与える恐れがあります。また、供用開始後の軍事演習によっても、これらの種を始め、ヤンバルでは本地域でしか確認されていないハマエンドウ、コウラボシ等も生存を脅かす影響を受けることが危惧されます。このように、ヘリパッドや進入道路の建設ならびに供用後の軍事演習は、ヤンバル固有の植物種や国内での自生がヤンバルに限られる植物種の絶滅を引き起こす可能性が高く、世界的にも特異性の高い貴重な「ヤンバルの森」の植物相、さらには琉球列島の植物相の特性を大きく損なうものといわざるを得ません。

植物分類学、植物地理学の研究を通じて、長年にわたって日本列島の生物相の保護に取り組んできた日本植物分類学会は、「ヤンバルの森」は日本が世界に誇るべき貴重な自然遺産であり、これを健全な次代に引き継いでゆくことはまさに国家的な課題であり責務であると考えます。従って、今回のヘリパッド移設計画に関しまして、「ヤンバルの森」の生物相の特徴が損なわれることのないように、計画の縮小や影響のより少ない場所への変更などを含めた全面的な見直しを強く要望いたします。

平成 18 年 4 月 10 日

独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構
理事長 シドニー・ブレナー 殿

日本植物分類学会
会長 邑田 仁

「沖縄科学技術大学院大学（仮称）整備事業に係る環境影響評価準備書」
に関する意見書

独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構の「沖縄科学技術大学院大学（仮称）整備事業に係る環境影響評価準備書」に関して下記の通り意見書を提出します。

今回の事業で沖縄島北部の恩納村に約 80ha の大学院大学のキャンパスを建設する計画が広告縦覧されました。2005 年に公表された「沖縄科学技術大学院大学（仮称）整備事業に係る環境影響評価方法書」と比べると、事業計画の規模や内容が具体的に示され、環境に与える影響が予測できるようになってはいるものの、事業の実施が生物相や生態系に与える影響は依然として重大だと思われます。この一帯は特異な生物相を誇る「ヤンバルの森」と比べると、人間活動の影響をより強く受けている場所で、これまでこの地域の生物相や生態系の重要性は見過ごされてきたように思われます。ヤンバルを中心に生育する固有植物種や国内での自生地が限られる植物種にとって、この地域は沖縄島の南限になるという点で価値があるばかりでなく、ヤンバルに見られない特殊な環境がこの地域に見られることから、事業予定地域は貴重種が集中するきわめて重要な地域であると考えられ、当学会としては建設計画の大幅な縮小あるいは変更を要望します。

琉球列島はアジア大陸の東縁に位置し、地質時代を通じて何度も大陸とつながったり離れたりした特異な地史をもつため、大陸から渡ってきた生物が取り残されたり、新たな進化をとげたりして、世界中でもここだけにしかみられない数多くの動植物が分布しております。その琉球列島の動植物相の中核的な位置を占めるのが沖縄島北部に広がる「ヤンバルの森」です。

「ヤンバルの森」は、オキナワジイとオキナワウラジロガシを主体とする世界でも稀な亜熱帯雨林ですが、建設予定地一帯は人為的な影響を受けているものの、谷部には「ヤンバルの森」の植生がよく保たれている地域です。また、尾根部の乾燥地には北部 3 村の狭義の「ヤンバルの森」に見られないリュウキュウチクオオマツバシバ群落が発達し、その中に点在する貧栄養の湿地には「ヤンバルの森」には産しないカガシラ、マネキシンジュガヤ、マシカタイ、トラノハナヒゲ、ケスナヅル、ナガバアリノトウグサ、タチミゾカクシなどの生育が確認されています。今回公表された調査結果では 596 種の維管束植物、179 種のコケ植物、142 種の藻類の分布が確認されており、その中には環境省または沖縄県のレッドデータブックで絶滅の恐れがあると判定された種が、維管束植物で 52 種、コケ植物で 29 種、藻類で 14 種含まれています。さらにカンアオイ属の新種、オニノヤガラ属の新種、新種の可能性のある苔類が事業地域内から確認されていることは、この地域が「ヤンバルの森」とも異なる高い学術的価値をもつことを示しており、建設予定地一帯が「ヤンバルの森」はもとより、琉球列島の植物相の特性を語るうえで欠くことのできない重要な地域であることが明らかになっています。今後も調査や研究が進めば、この地域の学術上および保全上の価値は一層高まるものと予想されます。

キャンパスとその進入道路の建設は、上記の貴重種の生育環境を消失させるばかりでなく、必然的に森林伐採や赤土砂の流失を伴います。森林伐採については、実際の伐採面積よりはるかに広い範囲に影響を及ぼすものであり、今回の事業によってさらに大きな影響が予想されます。また、赤土砂の流失は、流失自体が問題であるばかりでなく、流失した赤土砂が谷に流れこんで広い範囲を汚染し、生物の生存を脅かすものです。自然林の林内や溪流沿いの岩上などに生育しているツルカタヒバ、カンザシワラビ、クニガミサンショウヅル、コバノミヤマノボタン、オオサンショウソウ、ミヤマシロバイ、オオシロショウジョウバカマ、ホンゴウソウ、ヒナノジャクジョウ、シロジャクジョウ、アオジクキヌランなどの生育環境を悪化または消失させる恐れがあります。このように今回の事業は、ヤンバルやこの地域に限られる植物種の絶滅を引き起こす可能性が高く、世界的にも特異性の高い貴重な「ヤンバルの森」の植物相、さらには琉球列島の植物相の特性を大きく損なうものといわざるを得ません。

植物分類学、植物地理学の研究を通じて、長年にわたって日本列島の生物相の保護に取り組んできた日本植物分類学会は、「ヤンバルの森」は日本が世界に誇るべき貴重な自然遺産であり、これを健全なかたちで次代に引き継いでゆくことはまさに国家的な課題であり責務であると考えます。従って、世界最高水準や柔軟性を基本理念として掲げている科学技術大学院大学の建設計画に関しまして、「ヤンバルの森」の生物相の特徴が損なわれることのないように、「世界最高水準」の自然保護対策を実施するとともに、計画の縮小や集約化、影響のより少ない場所への変更などを含めた全面的な見直しを強く要望いたします。

庶務報告 (2006年2月～4月)

庶務幹事 黒沢高秀

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・国立情報学研究所電子図書館にかかる覚書を会長名で取り交わした。国立情報学研究所電子図書館に係る申合わせを図書幹事名で取り交わした(2月22日)。これらは、旧電子図書館サービス NACSIS-ELS から NII 電子図書館への移行、およびそれに伴う公開の範囲や著作権料の設定に伴う覚書および申合わせです。電子図書館事業の詳細に関しては、国

立情報学研究所の HP (<http://www.nii.ac.jp/service-j.html>) をご覧下さい。

- ・荻原博光氏による『分類』誌1巻1-2号掲載論文(藤井紀行「日本の高山植物の系統地理」)の国立科学博物館編『日本列島の自然史』への転載を会長名で許可した(3月15日)。
- ・株式会社八坂書房による『植物分類、地理』38巻掲載論文(大場秀章「イワベンケイ属の生物地理」)および『日本植物分類学会会報』6巻1号および3号掲載論文(大場秀章「分岐論と現代系統分類学」)の『大場秀章著作選』(全2巻)に転載・収録を会長名で許可した(3月19日)。
- ・学術著作権協会の「複写使用料支払いのための学協会現況調査」に回答した(4月5日)。

お知らせ

日本植物分類学会 2007 年度大会 (第 6 回大会) について

高橋正道 (新潟大学)

2007 年度に行われる第 6 回大会は、新潟大学でお引き受けすることになりました。日程は以下のように 2007 年 3 月 15 日 (木) ～ 17 日 (土) の 3 日間で、公開シンポジウムやオプションの温泉ツアーなども企画しています。3 日間発表の時間をとっておりますので、奮ってのご参加をお待ちしております。

分類学会大会期間中、ホテルイタリア軒 (〒951-8061 新潟市西堀 7 番町 1574 TEL: 025-224-5111 FAX: 025-224-7679 e-mail: front7@italiaken.com) では会員用に特別宿泊料金 (シングル 1 泊朝食付き 税サービス料込み 8500 円) を用意しております。宿泊希望の方はホテルイタリア軒に日本植物分類学会会員として、直接メールでご連絡ください。

- 3月14日(水) 編集委員会、評議員会 (ホテルイタリア軒)
- 15日(木) 一般講演、ポスター (医学部有任会館)
- 16日(金) 一般講演、表彰式、記念講演、ポスター (医学部有任会館)、懇親会 (ホテルイタリア軒)
- 17日(土) 一般講演、公開シンポジウム (有任会館)
3時頃から オプションツアー (角神泊、送迎バスで片道 1 時間位)
- 18日(日) お昼ごろ、新潟駅または、「新潟酒の陣」会場前で解散

☆角神温泉オプションツアー☆

新潟の奥座敷 (ホテル角神) <http://www.tsunogami.com/> の温泉で、日頃の疲れをいやしていただくとう企画準備しています。お一人さま 1 泊 2 食つき (フリードリンク付 飲み放題コース) で、税込み 1 万 5 千 7 百 5 十 円 となります。一軒宿ですので環境もよく、食事もなかなかです。「土曜日」でこの料金はお得です。

時期的なこともあり、ホテル側との厳しい交渉の末、参加人数が 50 名以上の場合のみ、実施可能ということになりました。どうぞ皆様、ふるってご参加下さい! 参加希望の方は高橋 masa@env.sc.niigata-u.ac.jp まで、Subject に [参加希望] と記入の上、メールでご連絡願います。オプションツアーの 1 次予約締め切りは 7 月 31 日です。

書評依頼図書

庶務幹事 黒沢高秀

右記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届いています。書評の執筆を希望される方は学会事務局まで電子メール (kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp) や葉書等でご連絡下さい。

山口昭夫撮影 / 著・湯田六男著 (2005)
「写真でたどる山と花の旅 草津・白根山」
108 pp. ほおずき書籍. 1286 円.

執筆者には該当図書を差し上げます。

出産・育児による研究中断後の日本学術振興会研究奨励金支給のお知らせ

庶務幹事 黒沢高秀

日本学術振興会より特別研究員-RPD(出産・育児による研究中断後の研究奨励金支給)の募集がありました。申請資格者は大学院博士課程修了者等で、平成18年4月1日から遡って過去5年以内に、出産または子の養育のため、おおむね3ヶ月以上研究活動を中断した者です。年齢、性別は問いません。申請受付は2006年6月5日～6月9日(必着)です。詳細は

http://www.jsps.go.jp/j-pd/rpd_gaiyo.html
のページをご覧ください。

鹿児島大学総合研究博物館植物標本室 (KAG) 一時休止のお知らせ

落合雪野 (鹿児島大学)

鹿児島大学総合研究博物館植物標本室 (KAG) は、建物改修工事のため、2006年7月末日をもって一時公開を中止します。標本閲覧等のご予定をお持ちの方は、早めのご利用をおすすめします。なお、公開再開には3年ほどかかる見込みです。くわしい日程がわかりしだい、おつて御連絡いたします。

東京大学植物標本室 (TI) の開室日についてお知らせ

邑田 仁 (東京大学)

東京大学植物標本室の標本は2ヶ所に分かれており、シダ植物、裸子植物と合弁花類が東京大学大学院理学系研究科附属植物園(小石川植物園)に収蔵され、離弁花類と単子葉植物が東京大学総合研究博物館に収蔵されています。2006年4月から当分の間、これらの標本室の開室日等を右記のようにいたしますのでお知らせします。なお、開室日であっても職員の出張などで臨時に閉室することがありますので、ご利用希望日の1週間前までにご連絡いただきますようお願いいたします。標本室の英文案内については <http://herb.um.u-tokyo.ac.jp> をご覧ください。

植物園標本室

月曜～金曜の午前10時～午後5時
(月曜日は休園日のため特に事前連絡が必要です)
連絡先: ti_herbarium@bg.s.u-tokyo.ac.jp
または電話 03-3814-2625
(東馬または邑田)

博物館標本室

月曜～水曜の午前10時～午後5時
連絡先: ti_herbarium@bg.s.u-tokyo.ac.jp
または電話 03-5841-2838, 2817 (清水)

編集後のつぶやき

ようやく Web 版のニュースレターを、カラーでお届けできるようになりました。これまでカラー画像は、編集人だけの愉しみでしたからねえ～。今月号のイチオシは、朴さんのいきもの便りにある、満開のチンダルシ。この鮮やかさを、カラーで満喫して欲しい！そうだ、これから空きスペースに、「写真自慢」のコーナーを設けよう！皆さん、腕によりをかけてすてきな植物やいきもの写真をお送りください。キャプションも忘れずに！

ところでGWは、皆さんお出かけになりましたか？編集人は、GWのすべてをかけて、昨年8月に引越して以来カオス状態だった自宅をやっと整頓……。それから、小さい庭の芝生を一部はぐり、落花生とツルムラサキを蒔きました。それはそれで楽しかったけど、四国や中国地方へ採集に出かけたかったなあ～。 by 編集人

平成 18 (2006) 年度野外研修会のお知らせ

邑田 仁 (東京大学)

～ 種子島の植物 ～

期日と日程：2006年11月18日(土)

～ 19日(日)

第1日(18日) ホテル(鹿児島から11:55着のフライトにあわせ種子島空港に迎えるバスを出します)に1時30分までに集合。付近の森林植物などを観察。夜に懇親会(南種子町の門倉亭南荘に宿泊予定)

第2日(19日)：マイクロバスを利用し、第1日に引き続き、森林植物、海岸植物などを観察。午後4時に種子島空港で解散(17:00発の鹿児島行きが利用できます)。

=====

薬用植物資源研究センター種子島研究部
<http://www.ts9.nibio.go.jp/tanegashima.html>
 の香月茂樹さんのご協力により種子島の植物を探索します。種子島は屋久島の陰に隠れ、目立たない存在ですが、比較的自然がよく残っており、ヤクタネゴヨウ、ヤクシマサルスベリ、タチバナ、タカクマムラサキ、ムラクモアオイ、ナゴラン、ヤマコンニャク、ヤッコソウ、コブランなど約1100種類の植物が知られています。また、屋久島産の植物と比較検討すべき分類学的に問題のある種類も含まれています。しかも植物調査に関する規制

がゆるいため、野外研修活動に適した場所と考えられます。そこで、シイ林内にヤッコソウが出現する11月に研修会を企画しました。

西之表市いこいの森(ヤッコソウ、カギカズラ、クワズイモ、リュウビソウ、アオノクマタケラン等)・中種子町熊野～南種子町大浦川(メヒルギ、ハマジンチョウ、モッコク、イヌマキ等)・南種子町前之浜(カワラヨモギ?、ハイネズ、コウシュウヤク、イヌマキ、ハカマズラ、ショウベンノキ、ハマサルトリイバラ等)などを探索する予定です。

また、時間があれば、多数の薬用植物が栽培されている薬用植物資源研究センター種子島研究部を見学する予定です。

=====

参加費用(種子島到着から出発までの宿泊、食事、交通費を含む)：15,000円。

申し込み：〒112-0001 東京都文京区

白山3-7-1 東京大学附属植物園

邑田 仁 宛

tel: 03-3814-2625

fax: 03-3814-0139

郵便またはFAXで氏名、連絡先住所、電話、FAX、メールアドレスを明記のうえ**6月30日まで**にお申し込みください。申し込み順に20名で締め切らせていただく予定です。なお、前後泊をご希望の方は申し込み時にお知らせください。お申し込みをいただいた方には7月10日までにご連絡いたします。

本の紹介

森林の生態学：長期大規模研究からみえるもの

種生物学会／編 正木隆・田中浩・柴田銃江／責任編集、A5判・384p＋カラー口絵8p、文一総合出版 ISBN 4-8299-1066-6 定価：3,990円(税込)。

今回の割引価格は3,192円(税込)です。

長期大規模研究が描き出す森林の生態系の魅力と、「広く・長く見続ける」森林研究のノウハウを紹介。

目次

- 第1章 生物が創り出す熱帯林の季節
- 第2章 多くの樹種が同時に結実する意味を考える
- 第3章 トチノキの種子とネズミとの相互作用—ブナの豊凶で変わる散布と捕食のパターン
- 第4章 セイヨウオオマルハナバチは在来植物の脅威になるか？
- 第5章 カエデ属の生活史—近縁な種の共存はいかにして可能か—
- 第6章 ミズキの生活史—鳥による種子散布は本当に役立っているか—
- 第7章 カツラの生活史—攪乱依存種が極相を構成するパラドックス—
- 第8章 森林動態パラメータから森の動きを捉える
- 第9章 鳥と樹木の相関関係から見た森林群集

- 第10章 地形から見た熱帯雨林の多様性
 第11章 気候の季節性は森林生態系にどう影響するのか
 —プロット間ネットワークを利用した
 グローバルスケールでの解明—
 第12章 ブナの生態研究の国内ネットワーク

割引購入の方法

下記の1～7の必要事項を記入の上、菊地宛にメール、ファックス、はがきで注文してください。割引価格は3,192円(税込)ですが、このほかに送料が1冊につき210円必要です(4冊まで)。5冊以上を同一箇所へ一度に送る場合の送料は無料です。勝手ながら、本案内による割引購入は2006年12月末日までです。

- 1 「分類学会ニュースレターの割引購入紹介による」と明記してください
- 2 本のタイトル:「森林の生態学;長期大規模研究からみえるもの」と記してください
- 3 必要部数:
- 4 注文者氏名:
- 5 送付先住所:
- 6 電話番号:
- 7 公費購入の場合必要書類と注意事項(日付blank、宛先など)。

申込先: 文一総合出版 担当: 菊地千尋
 メールの場合: charlie@bun-ichi.co.jp



ファックスの場合: 03-3269-1402
 ※必ず宛先(菊地宛)を表記してください。
 はがきの場合:
 〒162-0812 東京都新宿区西五軒町 2-5
 株式会社文一総合出版 編集部 菊地宛

代金の支払い: 代金は後払いです。本と一緒に請求書、郵便振替用紙がお送りしますので、振替用紙を利用して郵便局から振り込んでください(手数料は無料)。なお、銀行振り込みも可能ですが、その場合は手数料がかかります。
 (藤井伸二・菊地千尋)

豊橋市自然史博物館ガイドブック4 標本をつくろう～植物・菌類編～

豊橋市自然史博物館(編集・発行)
 ISBN4-924906-17-4 定価400円、送料別。
 A5版、64pp.

目次

はじめに

1. はじめてつくる植物標本
2. みんなに役立つ植物標本をつくる
3. いろいろな標本・資料—植物を記録する様々な方法
4. いろいろな標本・資料—コケ・キノコ・海藻の標本
5. 植物を守るための決まり
6. 参考文献

1. では自由研究レベルの標本、2. では本格的な標本の作り方を説明しています。イラスト入りでとても分かりやすく、しかも妥協なく丁寧な説明です。植物採集を指導する全ての方にお勧めします。学芸員の藤原直子さんが本文とイラストを担当されています。

購入方法

住所・氏名・電話番号を明記のうえ、返信用の郵便切手を同封し、代金を現金書留で以下まで送付してください。
 〒441-3147
 豊橋市大岩町
 字大穴 1-238
 豊橋市自然史博物館



表紙と購入方法は、ウェブサイト <<http://www.toyohaku.gr.jp/sizensi/>> でも見ることができます。多数購入される場合は、必ず購入方法をご確認ください。
 (小林史郎)

いきもの便り

韓国の美味しい種・2・

Park, ChanHo (パク チャンホ) (九州大学)

韓国の春は黄色い小さい花の「ケナリ」(*Forsythia koreana* (Rehder) Nakai, チョウセンレンギョウ) とピンクの薄花びらの「チンダルレ」(*Rhododendron mucronulatum* Turcz. カラムラサキツツジ) で始まる。この二種の花は市内の町から山々まで咲き、まだ緑色にはなっていない乾いた風が吹く韓国の春を黄色とピンク色に綺麗に染める。日本の春と言えば桜の花で、桜が満開になった頃にその下で同僚や、友達と酒を飲みながら春を満喫するが、韓国ではこのケナリとチンダルレの花が春の象徴だ。道路脇や町のあちこちで垣根のように原色の真黄色の帯が続く姿と、まだ茶色の枝だけの寂しい山で日当たりが良い所に咲いているピンクの群落を見ると春の暖かさがようやく感じられる。勿論、韓国でも桜の花見はある。しかし、日本みたいに桜の下で酒を酌み交わす光景はほとんどない。花見で来る人々は桜の花びらが舞い落ちる並木道をゆっくりと散歩する。

チンダルレは日本ではめったに見られないツツジ属の種類で、私は日本に来てからは東京大学大学院理学系研究科附属植物園本園(通称:小石川植物園)と日光分園(日光植物園)でチンダルレの花を見て寂しさを慰めたこともある。日本岡山県以西や四国・九州に分布するゲンカイツツジ(*R. mucronulatum* var. *ciliatum*)はこれの変種にあたる。チンダルレは日本のツツジ類と違って、花は葉が出る前に先に咲き、また花に蜜線があるので食べられる。チンダルレの花は、ツツジよりひと月先に咲き、それで韓国では4月から5月まではチンダルレ山行、5月から6月まではツツジ山行が一般的だ。韓国に分布するチンダルレ(*R. mucronulatum*)



ソウル付近、天摩山(チョンマサン)のチンダルレ *Rhododendron mucronulatum* 群落。(撮影・パクチャンホ)



チンダルレ花煎(撮影・パクチャンホ)

には変種、品種含め7種類が報告されている。白い花が咲く *f. albiflorum* があり、var. *ciliatum* は海辺と高い山に生育し、短い枝と葉に毛がある特徴で区別ができる。この中で *f. alba* は白い花がさき、海辺でたまに観察される。var. *latifolium* は葉が円形または広楕円形が特徴である。海辺に生育する種類の中で葉に光沢があり両面に突起があるのが var. *maritimum*、さく果がより細長いタイプが var. *taquetii* である。背が低く花も小さくて5つの雄しべを持つ *R. saisiuense* は済州島の漢拏山(ハンラサン)の頂上付近だけに生育する。

チンダルレの花が咲く頃はちょうど陰暦3月3日で、昔からは江南(こうなん)に渡っていったツバメや冬眠していた蛇が姿を現す日とされており、「サムウォル サンチンナル」と言って春の始まりを祝した。この日に蛇を見れば運勢が吉で、ツバメを見れば五穀豊年、白い蝶を先に見れば喪服を着ることになり、黄色の蝶やアゲハチョウを先にみれば縁起が良いとされた。この習慣は大昔から行われたが現代はその意味だけ残っている。この時期の風習としては農耕祭と花遊びがあり、その時に花煎(ファジョン)を作って食べた。この時、主に愛されていた花がチンダルレである。餅米の粉を混ぜて掌の大きさにして焼き、その上につみ取ったチンダルレの花をのせる。そうすると薄ピンク色の花びらで彩られた美しい物が出来上がる。これは韓国の伝統料理の一つであって春の気を体内に取り入れるような感覚で香ばしい食べ物である。今でも春に田舎の市場に行くと、情け深そうなおばさんが綺麗なチンダルレ花煎を焼く姿が見える。

チンダルレは杜鵑花(ドウギョングンファ)と書かれ、昔からホトトギスの花といわれ、春を告げる花として韓国では大変愛されている花でもある。叙情的にも愛されてよく詩や歌にも登場する。この花で酒をつくったのが杜鵑酒(ドウギョングンジュウ)と言って香りど鮮やかな色が楽しめる酒だ。

皆さんも一度、春の時に韓国を訪ねて、淡い桜の花に体表される日本の春と対照的な鮮やかな韓国の春の風景を味わって見てはいかがだろう。

中国植物記・2・

内貴章世 (大阪市立自然史博物館)



この調査で訪れた主な地域

広西壮族自治区は桂林に代表されるように石灰岩の一大産地であり、この石灰岩地は貴州省、雲南省東部からベトナム北部まで続いている。今回はランの調査の付き合いで、人がほとんど入らない石灰岩の山をいくつも登ることとなったが、これには参った。雨水で浸食されたトゲトゲの石灰岩がいたるところに露出しており、「アリドオンなんかこんなところはないよなあ」とぼやきつつ道なき道を藪漕ぎしている最中、不用意に手を掛けてケガをしてしまう。おまけに、まだ新しいゴアテックスのレインスーツが引っかかって何箇所も破れてしまう始末。すっかりやる気を失ってしまった。

それを察してくれた覃博士は、広西から雲南省に入る手前で調査チームをラン隊とアリドオン隊に分けるといいう取り計らいをしてくれることになり、このおかげで広西の那坡、雲南の黒枝果、麻栗坡、馬関などで *Damnananthus angustifolius* Hayata, *D. macrophyllus* Siebold ex Miq., *D. indicus* C. F. Gaertn. が次々と見つかリ、採集記録のほとんどない *D. tsaii* Hu も、古い採集地名を覃博士が昆明植物研究所に尋ねてくれ、硯山にまだ残っている照葉樹林の林縁で見つけることができた。 *D. tsaii* は葉が細長く棘が非常に長い



上：満開の *Aesculus wangii* (?)
下： *Lonicera* の一種

アリドオンという感じだが、根が数珠状に肥厚し、萼筒や花柄は無毛であり、特徴が異なる。

ベトナム国境に近い麻栗坡の照葉樹林は広大で、今回の調査の中では一番感動を覚えるものであった。遠くに満開のトチノキの仲間（おそらく *Aesculus wangii*

Hu) が点在しているのが見え、咲き始めは白く、後に赤色になるスイカズラ的一种 *Lonicera* sp. が林道脇にたくさん花を付けていた。谷筋のやや開けたところにはショウガ科の *Amomum tsaoko* Crevost et Lemarié が 2~3m もの偽茎を伸ばして藪を作っており、足元では小さいタケノコのような花序から黄色の花を覗かせていた。現地ではこの花序を食べるらしい。しかし、このときの行動は私と現地で雇ったガイドだけであったので、私の拙い中国語では調理法などを聞くことはできなかった。

調査も無事に終わり、昆明へ向かう前に一泊した文山では、覃博士が市場に行こうと誘ってくれたので、待てましたとばかりに町に出ることになった。外国の市場を見物するのは楽しいものである。川沿いの市場。野菜、軽食、飼鳥、日用品などが並び、それを求める人々で活気に溢れている。しかし、覃博士が市場に出かけてきた理由は見物ではなかった。市場を奥に進むと、ランの株を売る露店がずらりと並んでおり、品物は明らかに山採り品。それも 100 株や 200 株ではない。この市場だけで数千株にはなるだろう。これでは絶滅など時間の問題ではないのか。この光景に驚いた私が覃博士にそう尋ねると、林業局などと共同でこれから保護規制の準備を進めるとのことであった。しかし、地元民のささやかな稼ぎのタネとなっている現状では、規制がかかるころには手遅れとなるだろう。雲南ではこのような状態だが、広西の山々で見たランの群落が手付かずのままに残ってくれることを祈りつつ、市場を後にした。



上： *Amomum tsaoko* の花序
(左)、偽茎と葉 (右)
下： *Damnananthus tsaii*
雲南省硯山県にて

撮影は、すべて内貴章世。
撮影地は、特記なき場合、
すべて雲南省麻栗坡県。



入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒 305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会 田中法生（会計幹事）

Phone:029-853-8433

Fax: 029-853-8998

E-mail: ntanaka@kahaku.go.jp

会費：一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、

団体会員 8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

名 義 日本植物分類学会

平成 18（2006）年 5 月 16 日印刷

平成 18（2006）年 5 月 20 日発行

編集兼 福岡市東区箱崎 6-10-1

発行人 九州大学総合研究博物館

三島美佐子

発行所 福島市金谷川 1

福島大学共生システム理工学類内

日本植物分類学会